

MGF は、☑神第一主義、☑キリスト中心主義、☑聖霊主導主義の教会

礼拝黙想 **Meditating on Worship**

「神のことばの説教は神のことばである。」(マルティン・ルター)

▲「説教が、みことばに関する講義ではなく、みことばそのものが開かれ説かれて、明らかに神のことばそのものである時、はるかに強い力をもって聞き手の良心に突き刺さるのだ。あなたがたが聖句を背後に押しやって自分の考えを述べたりしないのは、靈感のすばらしさのゆえなのである。兄弟たち、もしあなたがたが聖書の正確な意味を伝える講解説教を習慣としているなら、私はあえてお勧めしたい。聖霊によって与えられたみことばそのものを堅く守り続けよ。多くの場合、主題説教は許容されるだけでなく適切なものであるが、聖霊によるみことばそのものの講解説教は、大部分の会衆にとって非常に有益であり、また喜ばれるものだからである。」(チャールズ・スポルジョン)

「説教とは、自分の経験や体験の話、あるいは人が感心するような話をするのではなく、神の言葉に基づいて神の言葉を語るのだ。」(車田秋次)

「聖書の説教とは、どういう説教か。それは定義的に言えば、『徹頭徹尾聖書に始まり、聖書により、聖書に終わる』説教である。そして構造的に言えば、そのテキストが、聖書の聖句からとられるだけでなく、そのテキストが示している主題が、首尾一貫し、一つの論理によって貫かれ、そして高められ、深められ、広げられて、その全体が上昇的にまたは下降的に、あるいは帰納的にまたは演繹的に発展させられ、そして全体が徐々にしぼられて、聖書的に結論づけられる説教である。」

(渡辺善太)

聖書は、神の言葉であるとわれわれは信じております。われわれを支える共

通の説教理解を言い表すひとつの重要な文章は第二スイス信条の命題です。「神の言葉の説教は神の言葉である」。前者の「神の言葉」は聖書を意味します。後者の「神の言葉」は今ここで聴く神の言葉です。大切なことは、聖書の言葉がそのまま神の言葉であるとは言っていないということです。聖書を説く説教があって初めて聖書が神の言葉となる、ということです。

講解説教は、一書を連続して説き続ける講解説教であろうと、一回限りの講解説教であろうと、聖書の言葉がそのまま朗読されればそれでよいというのではなく、それが説教の言葉となって聴き手に届くことがあって初めて神の言葉になるということを真剣に考え、そこに自分の課題を見出します。それは、聖書の言葉が、常に新しく語り出す神の言葉だということだとも言えます。いつも今ここにおける神の言葉となるのです。われわれは、その言葉を聴くために祈り、また備えます。その言葉が語り出されるために自分の説教が用いられることを信じます。そのため言葉をどのように語れるようになるかを問い続けます。聖書の言葉が、今ここで生きた言葉となることを信じるからです。そのとき、われわれはその聖書の言葉に自分が捕らえられるために備えます。われわれが聖書の言葉を動かして現代にも通用する歴史の言葉とするではありません。聖書の言葉が、今ここでわれわれを動かす言葉となることを待望するのです。そのため聖書を読むのです。聖書を通じて神が語ってくださる言葉がわれわれを捕らえることを期待し、信じて、われわれが読むのです。詩篇第一一九篇一三〇節は忘れ難い言葉です。聖書学者であり、説教者としても私に大きな感

化を残しくくださった渡辺善太先生が、まだ若い学生であった私ひとりに大きな声で暗唱して聴かせてくださった言葉です。御言葉が開かれると光が射出で無知な者にも理解を与えます。「御言葉うち開くれば光を放ち、愚かなる者をさとからしむ」という文語の言葉を渡辺先生から聴きました。大きな確かな約束の言葉をいただいたと思いました。この「み言葉の光」を待つのです。そこから講解説教が始まります。そしてわれわれ自身がその光の言葉の語り手となる光栄のなかに立つに至るのです。もとより聖霊の働きを待たなければなりません。しかも、それと共に、われわれ自身が確信をもって語り、働くことを求められます。そのように神の言葉に仕える者として語りかけられ、捕らえられることを信じて探求します。「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる」。この主の約束は、ここにおいても信じられるべき、励ましの言葉です。(加藤常昭)

われわれが目指す説教は、

1. 神ご自身が今ここで語ってくださる説教である。
2. そこで、聖書の言葉が神の言葉として語り始める説教である。
3. そこで、説教者自身を含め、礼拝する教会の群れが、その流れの中に巻き込まれるような言葉の流れとしての説教である。
4. そこで、「目に見えない方を見ているように」、望みの現実に生きる説教である。
5. 説教者は、会衆に先立って、この〈恵みの言葉の流れ〉の中に身を置いた者として、その存在そのものをも言語化して語る。

6. この<言葉の流れ>を生きる説教の言語は、それ自体生きた言葉である。いのちを映すイメージ豊かな言葉である。(加藤常昭)

説教が説教として成り立つためには、説教者自身が納得して語っていることが必要だと、しばしば言われる。「どんなに(教理的に)正しい説教でも、説教者が納得して語っているのでなければ、説教にならない」と。しかし説教は、神の言葉として「聞かれる」ものである。たとえ説教者が納得していなくても、神の言葉として聞かれているのであり、説教者自身よりも聞く者に納得されるということさえありうる。極端なことを言えば、説教者が納得しているかどうかは、説教の成立要件にはならない。しかし納得しないで語る説教は、説教者自身を疲れさせ、正しさの中に留まる力を失せさせる。そして、たぶん多くの場合は、聞く者にとってもつまらない。つまらない説教は、会衆のみことばへの集中を妨げる。正しい説教を深く納得して語るためには、説教者は苦悩し、「みことば」と格闘しなければならない。その格闘の様は、説教において明らかに発音されるわけではない。しかし教会の礼拝で、その説教を聞く信徒たち会衆は、説教者がその格闘をした上でこの説教に至っていること、そして今も格闘を続けていること、場合によっては、このときにも未だ納得していないことまでも感じ取っている。そのみことばとの格闘を、会衆も共にしている。格闘を回避し、あるいはさっさと納得してしまっ、会衆を置き去りにしてはならないのだ。(大住雄一)


もし私たちが本当に「神のみことばは生きていて、力がある」と信じている

ならば、どうしてこの神のことばをより深く、より正しく伝えることに熱心になるのではなく、自分の考えや主張を訴えることに熱心になのでしょうか？もし本当にみことばを宣べ伝えることによって人々を「キリストにある成人として立たせる」ことができる確信しているならば、どうして私たちは「知恵を尽くして」みことばの学びに取り組もうとしないのでしょうか？神のすばらしさを伝えたいと思うならば、私たちは神のすばらしさを明確に現すみことばを説き明かさなければなりません。キリストのすばらしさを伝えたいと思うならば、私たちはキリストのすばらしさを明確に現すみことばを告げ知らせなければならないのです。時に説教者は、聖書の教えを正しく語ることに献身していないがゆえに、キリストのすばらしさを人々が知ることを妨げることがあります。「主を見たいのに、あなたが前に立っていて主を見ることができません！」と信徒たちが訴えているかも知れません。主のすばらしさを伝えるために必要なのは、偉大な術術でも、分かりやすい例えでも、おもしろいお話でも、感動を与える物語でもありません。これらのものは真理を伝える助けになるかもしれませんが、絶対不可欠なものではありません。必要なのは、聖書の真理が伝えられることなのです。その真理が伝えられるとき、聖霊はみことばをもって人々を聖め、キリストに似た者に変える働きをなします。なぜなら聖書は生きた、力ある、有益で、信徒をキリストの御前で成熟した者として立たせることができる神のみことばだからです。教える者は、みことばを学び続けなければなりません。それを怠っては決して正しく聖書の真理を伝えることはできません。聞く者は、教える者がみことばを学ぶこ

とができる環境を整えてあげなければなりません。その学びがなければ自分たちがより主を喜ばせる者へと変わっていくことができないからです。パウロは「みことばを宣べ伝えなさい」と言います。他の手段を選ぶのではなく、主の働き人はこの一時に熱心に励むべきなのです。これこそが教会を導く者たちに与えられている第一の責任であり、教会にとって最も必要なことなのです。(岡田大輔)

「説教者の第一使命は、口をもって御言を語るということにあるのである。しかし、口さえあれば、その使命を果たせるというわけではない。説教は、夜店の香具師のように、ただうまくしゃべれば、それでことたりるというわけのものではない。口を通して語るそのことは、語る人そのものの、信仰と知識と生活からあふれでるものでなければならない。」(後藤光三)

「説教とは、言わば説教者という人格に、神の御言の使信が溶け込み、一体となり、分かちがたいまでのものとなり、その信仰を通して語られるのである。」(後藤光三)

ある教会員が、涙ながらに訴えてきた。「先生、私は、本当に教会に行きたいのです。しかし、教会に行っても、これが聖書を語っている言葉だと思えないのです。1週間の生活の中から、説教を聴くことを通して、慰められ、励まされ、厳しく打たれたいのです。しかし私の教会では、それが聴けないのです。どうしても、聞こえてこないのです。」(石井錦一) 

<お知らせ Announcement>

★4月26日(日) ディアコノス・ランチ。

MGFはキリスト狂徒の集まるキリスト狂会

「教会[マラナサ・グレイス・フェローシップ(略称:MGF)]はキリストのからだであり、すべてのものをすべてのもので満たす方が満ちておられるところです(エペソ1:23)。「あなたがた[MGF]は、キリストにあって満たされているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです(コロサイ2:10)。